世界文学全集　Ⅲ-6

モリエール

タルチュフ　ドン・ジュアン
怒りっぽい恋人　守銭奴
病いは気から　女房学校

鈴木力衛　井村順一　金川光夫 訳

河出書房

世界文学全集 III-6 モリエール

© 1969

編集委員
阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和40年9月13日 初版発行
昭和44年4月1日 再版発行

定価 430円

訳者代表 鈴木力衛
発行者 中島隆之
印刷者 草刈竜平
装幀 原弘

印刷・中央精版印刷株式会社
製本・中央精版印刷株式会社

発行所 東京都千代田区神田小川町三の六 株式会社 河出書房新社
電話東京(292)大代表 3711
振替口座 東京10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目　次

タルチュフ……一
ドン・ジュアン……七五
怒りっぽい恋人（ル・ミザントロープ）……一四五
守　銭　奴……二一三
病いは気から……二九九
女房学校……三七三
年　譜……四三九
解　説……鈴木力衛……四四四

タルチュフ

またの名、ぺてん師

井村順一訳

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbo

登場人物

ペルネル夫人　オルゴンの母
オルゴン　エルミールの夫
エルミール　オルゴンの妻
ダミス　オルゴンの息子
マリアンヌ　オルゴンの娘、ヴァレールの恋人
ヴァレール　マリアンヌの恋人
クレアント　オルゴンの義兄
タルチュフ　偽信者
ドリーヌ　マリアンヌの小間使
ロワイヤル氏　執達吏
警吏
フリポット　ペルネル夫人の女中

舞台はパリ、オルゴン家

第一幕

第一景

ペルネル夫人、フリポット（その女中）、エルミール、マリアンヌ、ドリーヌ、ダミス、クレアント

ペルネル夫人　さあ、フリポット、行くんです、あんな連中からは一刻も早くぬけだそう。

エルミール　追いつくのがやっとですわ、そんなにずんずんお歩きになって。

ペルネル夫人　かまわないでおくれったら、およめさん、どこまでもついて来るにゃおよびません。紋切型はご免なんだから。

エルミール　礼儀は礼儀ですわ。でも、おかあさま、どうしてそう、足もとから鳥が立つように……？

ペルネル夫人　ここのうちじゃ、なにをしでかすやら、見られたもんじゃありません。あたしの気持なんかそっちのけなんだ。こうやって出てくんだが、あたしゃたいそう不満なんだよ。こっちが教えてやろうと思や、いちいちなんのかのと文句をかえす。めいめい勝手なことばかりわめきちらして、うやまうってことをしないんだ。こじき御殿とはほんとにこのこったよ。

ドリーヌ　ですけど……

ペルネル夫人　おまえさんはね、お女中のくせして、口がすぎやしないかい？　いちいちくちばしをつっこんで意見を言うんだから、あつかましいにもほどがある。

ダミス　だって……

ペルネル夫人　おまえはね、息子さん、正真正銘の、ま、ぬ、け。あたしがそう言うんですよ、おまえのお祖母（ばあ）さんがね。これまでもたびたび、おまえの父親、あた

しのせがれにこう言ってきかせた、あの子はどう見てもやくざなむすこ、行くささぎざきは親不孝ばかりかけるだろってね。

マリアンヌ　わたくしは……

ペルネル夫人　妹さんのほうにも言っとこうか。あんたは猫っかぶりで、虫も殺さぬような顔をして、ふん、そのおしとやかな様子ったらないよ。だが、よどんだ水は濁った水と言ってね、かげでいやなことをしくさってるに違いあるまい。

エルミール　でも、おかあさま……

ペルネル夫人　およめさんや、一言いわせてもらや、あんたのやりようは、まるでなってない。ほんとうならこの子たちに手本を示してやらなきゃならないところじゃないか、死んだ嫁のほうはそりゃよくやったもんさ。どうだろう、おまえさんの金づかいのあらいことったら。それ、お姫さまじゃあるまいに、めかしこんだその恰好、まずそれがあたしにゃ気に入らないんだ。ご亭主だけに好かれようと思う女なら、おまえさん、なにもそんなに着飾る必要はないはずだよ。

クレアント　しかし、結局のところ……

ペルネル夫人　よめのお兄さん、あなたはたいへんりっぱなかた、あたしゃ崇めたてまつってますよ。けどね、もしあたしがうちの息子、ここの主人だったら、出入りはご免こうむりたいところだね。やれ、人生いかに生くべきのなんのと、それもまともな人なら聞いてあきれるようなお説教をのべつ幕なし。あけすけにしゃべりすぎるかもしれないが、こりゃあたしの性分でね、お腹んなかにあることはあらいざらい言ってのけたいんだよ。

ダミス　ごひいきのタルチュフさんはさぞかし……

ペルネル夫人　あのかたはりっぱなかたです。おっしゃることをよくお聞きなさい。そのおかたにおまえみたいなまぬけが言いがかりをつけるんだから！　あたしゃもう我慢ができない、むしゃくしゃしてきますよ。

ダミス　なんですって？　我慢できないのはこっちですよ。えせ信者がえらそうな口をききやがって！　このうちにあがりこんでまるでお殿様だ、あの先生のお許

しを得ないことには遊びも楽しみもいっさいまかりならんとくるんだから。

ドリーヌ　おっしゃることをいちいちごもっともで聞いてたら、なにも出来やしません、みんな罪になっちまうんですからね。なにからなにまでご監督、まあ、そのうるさいことといったら……

ペルネル夫人　監督してくださるんだ、こんな結構なはなしってないじゃないか、あのかたは、おまえたちを天国へ導いてやろうというおつもりなんだよ。うちのむすこはさきに立って、おまえたちみんなにあのかたをお慕いするようしむけなきゃならないんです。

ダミス　いやですよ、おばあさん、父親のいいつけだろうとなんだろうと、あいつをよく思おうなんて、まっぴらだ。うそはいやだからはっきり申しますが、あいつの一挙一動、ぼくはいちいちかんにさわる。いずれひともんちゃく起こすでしょう、相手があんちきしょうだ、ぼくだってひとつ派手にやらかすことになりそうですね。

ドリーヌ　そうですとも。見ず知らずの男がずかずかあがりこんでいい気になってるんだから、こんな外聞のわるいことってありゃしません。はだしのまんま、二束三文のボロをまとってやって来た乞食が、身のほどを忘れるもいいところ、いまじゃいちいち小言を並べ、すっかり主人風をふかしてるんですからね。

ペルネル夫人　ちょっ！　なにをぬかすんだい！　万事あのかたのありがたいお言葉どおりに行けばいいんだよ、ずっとしあわせになれるってこった。

ドリーヌ　ご隠居さまは聖人みたいに思ってらっしゃいますが、とんでもない、どこから見ても偽善のかたまりですわ、あんなひと。

ペルネル夫人　口をお慎しみ！

ドリーヌ　あのひとにしたって、お供のローランにしたって、よっぽどたしかな保証人でもないかぎり信用しませんね、わたくしは。

ペルネル夫人　召使がどんな男かは知らないが、ご主人のほうは、そりゃりっぱなかた、このあたしが保証します。おまえたちが恨んだりきらったりするのも、あのかたからずばりと弱いところをさされるからだろ

う。罪をまのあたりにしたらご立腹だろうよ、あのかたは。神さまの思し召しにかなうようなおこないをなすってるんだから。

ドリーヌ　へええ、じゃ、とくに最近、うちにひとが出入りするたんびにあのかたのご立腹、これはどういうわけでございます？　いらっしゃるのはきちんとしたお客さまがたばかりだのに、やっぱり神さまの御心にそむくんでしょうかしら？　まあ、頭ががんがんするくらいがなりたてる……ごく内輪にそのわけを申しあげましょうか？（エルミールをさして）察するところ、あのかたはうちの奥さまにやきもちをやいていらっしゃる。

ペルネル夫人　おだまり。すこしゃ気をつけてものを言うがいい。客の出入りをとやかく言うのは、あのかただけじゃないだろう。しょっちゅうひとが来ちゃ大騒ぎ、門口にゃ年じゅう馬車が並ぶ、下男どもがたむろしてがやがやさわぐ、もうご近所じゃえらい評判なんだから。じっさいはそれほどのこともあるまいが、とにかくひとの噂にのぼってるんだからね、こりゃけしていいことじゃありません。

クレアント　しかし、しゃべりたいひとに黙れと言ってもはじまらんでしょう。根も葉もない噂をまかれたからといって、仲のいい友達を捨てるんなら、こんなばかばかしい話はありません。いや、思いきって絶交したってはじまらない、世間の口をつぐませるわけにはいきませんからね。悪口をふせぐとりではない。くだらん陰口は聞き流すことです。こっちが後指をさされないような生活をしていればそれでいい、おしゃべりには勝手にしゃべらせておきましょうよ。

ドリーヌ　ここの悪口を言うのはきまってますわ、お隣りのダフネさんとそのちびのご亭主、しょっちゅうもの笑いのたねになるようなことをする人たちにかぎって、まっさきにひとの悪口を言うんだから。なんでもないことをとりあげて、やれだれそれの仲があやしいのなんのと、鬼の首でもとったようにふれ歩く、さも本当らしく話に尾ひれをつけるんですからね。他人のおこないを自分の色に染めあげりゃ、自分たちのおこないがおおっぴらにとおると思ってるんだ。だれだっ

て似たようなもんだろう、と勝手な理由をつけて、自分たちの不義を無邪気なものに見せかける、世間の目がのがれきれなくなったもんで、少しでも注意をそらそうとするんですよ。

ペルネル夫人　そんな屁理屈はいくらこねても無駄だよ。オラントさんをごらん、ただただ神さまにお仕えしようという、その毎日の心掛けはお手本にしたいようなもんさ。話によるとそのお人が、ここへ来るひっきりなしのお客をにがにがしく思っていなさるそうじゃないか。

ドリーヌ　たいしたお手本でございますとも、あのおかたはそれこそりっぱなご婦人、おこないすましていらっしゃいます。でも、あそこまであつい信仰をお持ちになれるのはお年のせいですわ。しようことなしに貞女になったと、これはもうごかぬ評判。むかしは殿方からも相当ちやほやされる時期があったんだし、あのかたもしたい放題のことはなすったはずです。ところで、うつくしい目の輝きもしだいに失せてくる、もうご自分を相手にしてくれない世間はいっそのことあきらめよう、と、今度は賢婦人さまをきめこむ——容色おとろえた弱みをものものしいヴェールでおおいかくそうという寸法です。むかし浮名を流した女がよく使う手じゃありませんか。色男どもがよりつかなくなるつらさもひとしお、こううらぶれてしまったんでは、さびしいし、やきもきするし、貞女ぶるよりほかに救いみちがないというもんでしょう。こういう奥方にかぎってその厳格なことといったら！　いちいち目にかどを立て、なにごともおゆるしくださらない。ひとりひとりの暮しぶりをとらえておっそろしいご意見、いえ、それも慈悲の心からじゃなく、ねたみなんです。寄る年波、ご自分のからだがいうことをきかなくなってくると、ほかの女がたのしくやってるのがいらいらするばかり、もう見ちゃいられないんですよ。

ペルネル夫人　（エルミールに）こんなでまかせを聞いてりゃおまえさんは満足なんだろう。およめさんや、このうちへ来たら黙るよりしょうがないやね、奥さまが胴元になって一日中わめきちらしてるんだから。でも最後にあたしも、一席ぶたしてもらいます。いいか

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbo

ね、むすこはあの信心ぶかいかたをここへお連れした、まったく感心なことをしたもんですよ。あのかたは神さまのお使いとして、おまえたちのひねくれた根性をただすためにみえたんだ。救われたいと思ったら、おっしゃることをよく聞くがいい。あのかたがおとがめになることはいちいちもっともだろう。ここのうちじゃ、お客に、舞踏会に、おしゃべり、どれもこれも悪魔のしわざで、信心の言葉なんかこれっぱかりも聞けないようなもんばかりじゃないか。無駄口に馬鹿ばなし、へらず口ばかりたたいてるんだろう。おおかたは隣近所のひとをさかなにして、だれかれの見さかいなく悪口を言ってるんだ。いかに分別あるひとでもこんなごったがえしの寄り合いに出たら、頭がへんになっちまうよ。数かぎりない陰口があっという間にでっちあげられる、こないだある先生がうまいことをおっしゃった、こりゃまるっきりバビロンの塔（「バベルの塔」の言い誤り）だってね。めいめいがべちゃくちゃしゃべりづめではてしがない……で、その先生のおっしゃるにゃ……（クレアントをさして）ふん、もうこの旦那はにやにやしてらっしゃるね！　そんなに笑いたきゃ道化でも探しに行くがいい、いったいあたしを……（エルミールに）およめさんや、さようなら、もうなんにも言いません。このうちにゃほとほと愛想がつきた、当分足をふみ入れることはなかろうね。（フリポットに平手打ちをくわせて）さあ、なんだい、ボンヤリして、ばかみたいに口を開けて！　おまえ、痛い目にあいたいのか、ぐずぐずしないで歩くんだよ！

第二景

クレアント、ドリーヌ

クレアント　お見送りはごめんだ、また喧嘩をふっかけられたらかなわんよ、あの婆さんときたら……

ドリーヌ　まあ、そのお言葉をご隠居さまにお聞かせしたいもんですわ。きっとこうおっしゃいます、「はばかりながら、あたしゃまだ婆さんと呼ばれる歳じゃありません」

クレアント　つまらんことでつっかかってくるんだから、すっかりタルチュフにのぼせあがって！

ドリーヌ　いえいえ、旦那さまにくらべたらまだまだあのくらいは……旦那さまをごらんになったら、きっとおっしゃいますわ、「なお始末がわるい」内乱（フロンドの乱をさす。一六四八―五三年）のときはしっかりしたおふるまいで、王さまのため勇敢にお働きになったあのかたが、タルチュフにのぼせあがってからというもの、どうでしょう、まるでふぬけ同然ですわ。あの男をきょうだいと呼び、じつの親子やつれあいはそっちのけ、しんから大切にしていらっしゃる。なんでも打ち明け、いちいち指図を仰ぐ。頬ずりをする、かわいがる、好きな女にもあんなにやさしくできやしません。食事のときは上座にすえて、あいつが六人前もたいらげるのを目を細めてごらんになる。どんな料理もいちばんいいところをとらせるんです。あいつがげっぷをすると（原注―しゃべっているのは召使である）、「神のおん加護がありますように」と、くるじゃありませんか。つまるところ、旦那さまは頭がどうかなすっておしまいだ、あいつのことにかかりっきり、崇めたてまつっておいでになる。おりにつけてはほめちぎり、なにかというとすぐタルチュフ、なんでもない仕草が奇蹟に見え、口にする言葉がぜんぶ神のお告げに聞えるんです。あいつのほうは、こいつはいいかも、しこたま甘い汁を吸ってやろうとばかりに、あの手この手、うわべを飾って旦那さまの目をくらまそうとかかる。あのにせ信心め！　旦那さまからずるずると金をまきあげ、いい気になってあたしたちになんくせをつけるじゃありませんか。お供をつとめるあのとんちきまでそうなんだ、いっしょになって教訓を垂れようとする。目をぎょろつかせてお説教に来ちゃ、リボンや口紅、つけぼくろまでとってほうり捨てるんですからね。あのろくでなし、いつかなんかは、「聖者の華」（十七世紀初頭に死んだスペインのイエズス会員リバデネイラの著書）の中に襟飾りをおししておいたら、「悪魔の飾りと神聖をいっしょにするのはおそろしい罪」そうぬかすんです、いきなりつかんでひき裂いてしまったじゃありませんか。

第三景

エルミール、マリアンヌ、ダミス、クレアント、ドリーヌ

エルミール　（クレアントに）よかったわ、お見送りにいらっしゃらなくって、おかあさま、門口でまたひとくさりお説教。主人がもどって来ますわ。むこうじゃあたくしに気がつかなかったようですから、階上へあがって帰りを待つとしましょう。

クレアント　ぼくはここにいよう、ちょっと挨拶だけすればいいんだから。

ダミス　妹の結婚のこと、おやじにつっついてみてくださいませんか？　どうもおかしい、タルチュフのやつが邪魔だてして、おやじをとんでもない脇道にそらそうとしてるんじゃないかと、にらんでいるんです。おわかりでしょう、こいつはぼくにとっても重大問題です。うちの妹とヴァレールが愛し合っているように、ヴァレールの妹というのが、ぼくにはだいじなひとなんですから。万一……

ドリーヌ　旦那さまのおもどりです。

第四景

オルゴン、クレアント、ドリーヌ

オルゴン　やあ、義兄さん、こんにちは。

クレアント　いまおいとましようと思っていたところ、お目にかかれてほんとうによかった。田舎はどうです、まだ花ざかりにはなりますまい。

オルゴン　ドリーヌ……（クレアントに）義兄さん、ちょっと失礼。留守のあいだが気にかかるから、まず様子をきいておきたい。（ドリーヌに）この二日間、べつに変わりはなかったかね？　みんなどうしている？　元気でいるか？

ドリーヌ　奥さまは一昨日、わけのわからぬ頭痛とお熱

が晩がたまでおつづきになりました。
オルゴン　タルチュフは？
ドリーヌ　タルチュフ？　あのかたは健康そのもの、肥ってあぶらぎって、肌はつやつや、唇はまっかでございます。
オルゴン　いじらしいひと！
ドリーヌ　夕方、奥さまはぜんぜん食欲がおありにならず、お夕食のときもお皿に手をおつけになりませんでした。ご気分がまだすぐれなかったのでございます。
オルゴン　タルチュフは？
ドリーヌ　奥さまを前にしてひとりでご夕食、いかにも信心ぶかいご様子で、しゃこを二羽と、羊の股肉の挽いたのを半分、ペロリとおたいらげになりました。
オルゴン　いじらしいひと！
ドリーヌ　ひと晩じゅう、奥さまはまんじりともなさいませんでした。お熱のためおやすみになれません、明けがたまでつきっきりの看病でございました。
オルゴン　タルチュフは？
ドリーヌ　すっかりいい気分でうとうととおなりになり、食卓からすぐ寝室へ。あたたかいベッドにおはいりになるやいなや、翌日まですやすやとおやすみになりました。
オルゴン　いじらしいひと！
ドリーヌ　最後にわたくしどもの言い分がとおって、奥さまは刺胳を受ける決心をなさいました。で、いいあんばい、すぐ薬におなりになりました。
オルゴン　タルチュフは？
ドリーヌ　元気回復、申し分なし。いかなる悪にも立ち向かう魂をしっかと固め、奥さまの失われた血のうめあわせとばかり、朝ご飯にはブドー酒を大さかずきに四杯お飲みになりました。
オルゴン　いじらしいひと！
ドリーヌ　結局お二人ともいまはお元気でございます。わたくし、旦那さまが病後を案じていらっしゃるむね、奥さまのところへお知らせにあがります。

第五景

オルゴン、クレアント

クレアント　あいつ、あなたを鼻の先でわらってますよ。ぼくも、ご機嫌をそこねる気は毛頭ないが、はっきり言ってあの女中が正しいと思う。だって気まぐれにしてもこんなのは聞いたためしがない。今どきどんな魔力をそなえた男がいるか知らないが、なにもかも忘れてそいつにうちこもうなんて……！　乞食同然の境遇から救ってやり、家へひきとったばかりか、そのあげくは……

オルゴン　待ちなさい、義兄さん、あんたは問題の人物を知らないからそう言うんだ。

クレアント　ええ、たしかに、知りませんとも。でも、どんな男か知るためには……

オルゴン　義兄さん、あのひとと知り合ってごらんなさい、あんただってきっと惚れこんでしまうだろう、ただただぼーっとなってしまうにきまっている。あの人物は、……つまり……ええと……その……つまり人物なんだ。あのかたの教えに従ってごらん、深い心のやすらぎを味わい、世間を塵芥同然にみなすことができるようになる。そうとも、お話をきくと、わたしはまるで別人のようになる。あのかたは、なにごとにも愛着を持つな、とお教えになる、わたしの魂をあらゆる執着からたちきってくださるんだ。いまのわたしは、たとえ親兄弟や妻子に目の前で死なれても、これっぱかりも心を動かすことはあるまい。

クレアント　人間らしい気持ですか、それが！

オルゴン　ああ！　わたしがあのひとに最初に出会ったいきさつ！　あれを知っていたら、いまのあんたの気持だってわたしと同様だろう。あのひとは毎日教会にみえ、ものしずかな様子でわたしの真向いにひざまずく。神にささげるその祈りはひときわ熱にあふれ、なみいる信者の目をひくのだ。神を求めてやまぬあのかたの深いため息、何度もひれ伏して床に接吻なさるそのご様子。わたしが出ようとすると、あのかたはすば

やく先へ廻って、出口で聖水をかけてくださる。お供には忠実に主人を見習う少年がいる、その口からあのかたの赤貧ぶり、そのひととなりを聞き知って、わたしはあのかたに施しものをした。と、あのかたは、「これは多すぎます、その半分でじゅうぶんでございます、わたくしはあなたのご慈悲に値せぬ男」こうおっしゃるじゃないか。わたしが受けとらずにいると、その場で貧乏人たちに余分をわけておやりになるんだ。とうとう、神さまの思し召しにより、うちへ来ていただくことになった。以来、わが家は万事が順調だ。あのかたはすみずみまで目をくばってくださる。わたしの体面が傷つかぬよう、家内にまでじつにゆきとどいたご注意、色目をつかう男でもありゃすぐに知らせてくださる、その点、わたしよりもずっとずっとやきもちをおやきになるくらいだ。信仰のお心がどれほどあついか、あんたには考えもおよぶまい。ささいなことまでご自分の罪とお考えになり、ほんのちょっとしたことで、もう心をお痛めになる。この前なんかは、「お祈りの最中、蚤をつかまえ、腹立ちまぎれに殺してしまった」こうおっしゃって、いかにも自責の念にたえきれないご様子をなさるじゃないか。

クレアント　あきれた！　どうみたってあなたはへんですよ。そんな話をなすって、ぼくをからかおうというおつもりですか？　どういう了見です、まったくばかばかしい……

オルゴン　おや、その話しっぷりには無信仰のにおいがする。魂が冒されかけていますぞ。もうなんべんも言って聞かせたが、あんたはそのうちろくでもない目に会うだろう。

クレアント　それがあなたのお仲間のきまり文句じゃありませんか。自分たちがめくらならみんなもそうならなくちゃ気がすまない、いい目をしてるものは無信仰、みてくれにだまされず、崇拝の念をおこさぬものがいれば、神聖をおそれぬ不敬と不信のやからとよぶ、――なんとおっしゃろうと、ぼくはびくともしません。こっちにはこっちの言い分があり、ぼくの心は神さまがお見とおしくださる。あなたがたのようなこりかたまりの言うなりにだれがなるもんですか。にせの

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbo